寛永諸家譜

清和源氏甲九冊之内
義家流之内新田流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (9)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

杉平

寛永諸家系圖傳

清和源氏
義家流四
甲斐

杉平
長親慶流

長親

信忠○

浅草文庫

親盛

三郎次郎　右京亮　福鎌と号す

親次

三郎二郎　右京亮

清康君に志たてまつり義場ふかもしく

時代類なき働にて鎗三郎次郎

と号す

享禄二年　清康君三河守刑部

城をせめ給へ無谷衆と合戦す城内ふ

おめく親次一人の大将にて時移紛

して行くに日暮一足も引ずく

ゐてすすみ一度に指詰とも

ひのまこゝにて敵陣へ乱入

郎次十餘人とともに打死す時

二十八歳

親俊

三郎次郎　右馬助

康親

右京亮　筑後守

東照大権現ゟ御諱之内を以ちなる

慶長元年大御番ゟ

同十年八月ゟ四十二年にして

従五位下に叙せられ御諱の康の字

ゟ給ふ

元和二年二月廿三日病死　五十一歳

法名良心

康盛

右京亮　摂津守　後ハ筑後守と

元和二年二月朔日十七歳にして従

五位下に叙す

康孫

宇右衛門

寛永七年七月十日

将軍家に奉て御小姓組の内

番に勤し

康後

三郎兵衛

寛永十八年六月朔日

将軍家に奉て

筑後守康盛　家後梅花

国立公文書館
National Archives of Japan

信宮

5一　内藤正或いく親盛が兄なり
桜井と号す
享禄二年五月廿八日　清康君牧野
伝次伝蔵彩次彩と三引沖池て
合戦のとき信宮たゝびゝ子清宗
清康君の命をうけく士卒の清冷を
ひきゝゝて戦功の戦屈して志ゝく
引きゝゝさ牛の利ゝ又ゝゝんでゝ地

悦ばるる　清康君げんぷくなりとの
さげ信定清定兄弟ともふ兄弟ひたまひ
先ものもいくさ大将軍敵
の大将伊勢新次郎義盛くるとな
らべて討死すまかりつる日河ものもろ
て吉田の城へ入たまふ
同年尾引軍におのく尾引勢
と合戦のとき　清康君命をうけて
信定清定兄弟勢を

ひきつれ山軍功ゆへ科野を給はるなり
清康君戦場のうつたまふ信定兄
をうけ給まして功をなすといふ
なり　清康君御逝去の後一族譜家
人逆く信定兄弟ともに家臣のご
とくなる親の家ものも　廣忠卿を
勢引もつて岡崎の城へ入なり
天文七年十一月廿七日卒寸　法名道見

義春

東條甚太郎

利長

長井兵四郎　法名表春樹祥

天文九年　廣忠卿　出一族深沢島に

康なりしに利長等に命じて安祥の

加勢としてかこまおりむこさ城中に

たてごもりしむ

六月六日尾引の大軍きたりこまを

し城を安祥たる助長長

る城戸とひしくしたりしに信

康甚六郎康忠長家うれ和睦代

京林長助門長長清を長る数十

人討死す尾引勢も又おりくうる波

急八右衛門尉矢とりて敵をもぐ

利長士卒をとげまして力くし城とま

らゆへ尾引勢うれうなへとまらぞさで

城内に陣すと云へども法螺引き

清宗

与一 内膳正
享禄二年牧野と合戦の時父と
同じく 清康に討死
天文十二年十月三日 法名道花

家次

監物
永禄元年
大猷院様家次に命じて屏風引科屏風を
もて屏風の兵附城とさらいくこまをせし
家次兼うちとして廣瀬流竹村孫七郎
飯田金平戸波平右衛門佐伝兵衛と討
とりの分雑兵数をとらずこまをもち
屏風の敵兵をとりくに敗れたる由へかこ

く科野の城とたゝ今川義元氏真
その功を称して感状をさゝ
げ同六年上杉氏三引岩略寺うを
ゆく出城とゝまへ侍大将七頭をゝへて
かゝ見をまもる
大指現市出るつゝて家沢と先をとして
こゝまをせめゝこまふ家沢 命をうけて他
此城まゝ〳〵すゑ勢をゝゝて即時ふ
此城を奈ゝう後河勢数軍をゝう

ゝう
同年七月廿九日 卒去 法名道観

忠正

ゝ一
永禄十二年上杉氏義謙と没落
して約法寺後中守居城を引魚川
の城をたてごゝゝゝ出をゝ天ゝ
ゝまゝ

大指現市馬を生きたれをせめ給ふ
とき忠正手勢を引かく先陣を
はせみ貴戸と屋ら旗馬ざるとを
屏源はせ市やうく屏のうち
はせあいる時を 仕まりて忠正勢を
けはひとい子を人数をつめ
て陣を引まろし
大指現忠正ら今日の軍功はなら後
英なりとして市はうへと給らこ

しれを感ぜらる
元亀元年六月織田信長浅井勢
と江引姉川おかく合戦の時
大指現市勢として市るを出し勢
金ら勢をつらまふ忠正戦場おるて
いさみたるうく彩背をたく勢
勢つまこうちら
天正元年正月十日夏沼彩公江引
野田城をたくごろとき甲引ら

見とせし忠正
大檀現の命をうけなまろ城中の加勢よ
おもむきく見とまりろ
同二年五月
大檀現信長と同じく士卒をひきく武
田勝頼と二引長篠ふく合戦のとき
忠正士卒をひておもく武田方と
うちとる信長忠正が軍功を感ぜら
同五年七月廿日卒去、年四歳

忠吉

清名道春

与次郎
忠正死後忠吉家督をつぐ
天正九年二月高列言氏の城を
せめまつり忠吉ひきもち
大檀現の城没落の後田辺城攻
まもるく出陣とつき忠吉ともろむ

大指現の位ふりて数の曲輪一所とせめ
とら亀の甲曲輪と名付く
大指現色と感じたまひ二引の東條
と桜井の海地四百石浦加増して
忠吉卒去すうちまた又二引拝堅
まして二千石の地を給ふ
同十年六月廿四日卒去二十四歳
法名道薫

家廣

同慶正
忠吉卒去の後家督とせ
天正十年
大指現甲引渉入国の時軍役を勤し
同十二年石引小牧陣のとき森左
兵衛黒田の酒井左馬頭二引勢
三千騎を以て先手を勤し家廣

会森左義方士卒井戸弘泉以下
の数あまたこうちとら
大指現の侍なり寸
同年武州松山城とたまら二万
石と領寸
同十九日奥列侍より
大指現御出るのとき家康仕
七月ちう十月ちうまて中新田の
城の番と勤し
寄せ三ヶ所六月十四日卒去二十歳
法名道曜

信吉

伊豆守
信一か春子ちなり
母ハ
大指現の御妹なり

国立公文書館
National Archives of Japan

家康ハ信吉ゟ異父同母の兄たち

忠頼

信吉死立後　母ハ信吉ゟ同
家康高ニ付ル　忠頼家督ニ
慶長五年七月異父弟　陣のとき
大坂城御番ニ付ル
同年九月清洲　関原江陣ゟ
大坂城江戸ゟ清洲ニ　忠頼
伏見城ニ二ヶ月　思召ゟ
大坂城の命ニ付ル　思召の城と
まりゟ関ヶ原ニ　関原ニ付ル大ゟの城
の番ニ　勤めゟ
番ヶ年領　松山一万石の外金ゟ城ニ
一万五千石と　領す
同六年二月ニ　清洲の城と
五万石の地ニ　清洲城米五万石と
領ス

同八年
大檜現市上洛のたいぐふ濱松の城に洛
市あつまりきたる光の市脇指を百
領す
同十年
石淀院殿市上洛の時濱松の城に入市
ゆる
同十二年後府市城の普請を勤む
同十四年九月廿九日卒去二十八歳

清谷浄春

忠重

大膳大夫　淀五位下
母八織田右兵衛尉の女
慶長十五年武州深谷の城を給ら
八千石を領す
大坂夏の陣のとき江戸竹橋
田口の市門を勤む

元和四年　紀州浅野侯城の普請を勤し
同五年　御城のとき江戸の丸の
浅野守普請を勤し
同六年　小の丸の浅野普請を勤し
同八年十月ゟ従因幡の城を始め
一万五千石を領す
同九年　御城のとき作州の居城ふ
て立書す
寛永三年　御城のとき房州百首

清水の書を勤し
同四年八月ゟ翌年八月まで大坂
城へ立書す
同六年　西の丸石垣の浅普請を勤し
同年　鍛冶橋の浅城の普請を　作つ
けしゝ
同九年十月ゟ翌年三月まで後
府の城へ立書
同十年七月ゟ八月ふるまで

江戸竹橋の法門番と勤む

同年八月

将軍家の鈞命にて後引田中の城に

うつる二万五千石を領す　こゝに廉元

の御馬とくぐまる

同十一年御とゝ法のたいぐく　田中乃城

小浜御城にうつるとき国次の古服拵な

らびに銀子二百枚を領す　豊臣の

ときゝ五千石の御加増をくぐまる

同十二年八月引魚川の城に移る

四万石を領す

同十五年八月より堅固二月まで

後府浄城の古普請をなす

同十六年二月十二日辛未三十九歳

法名道喜

忠亜

漢詩守　道喜作下　安倍正国

享保十七年七月十一日家督
相続
従五位下に叙す
元和元年十二月
寛永十六年七月侍従
頭
伯父
従五位下に叙す
侍従
書院番の組
忠氏
三七郎

寛永十七年三月
相続
家督
忠成
宮内

忠勝
七七郎
相続
家督
養子

宗長

因幡守　法印法橋

忠好

左京亮

忠利

織部正

寛永二年七月

右法院殿と称す

同三年四月清水寺の堂を勤む

同年十二月清水寺切米五百俵を給ふ

同八年十一月千石の采地を給す

同九年六月

将軍家の鈞命によりて清書院番を

勤む

同十年二百石の清加給を賜ふ

女子

母ハ木下右衛門方妻延徳ニ出家
織田上野介信孝ノ書

忠政

万助
寛永十六庚子三月廿日ヲ以
信州仮山の城ヲ給りて四万石ヲ領
地す

同年七月ヨリ京ニ
ヲ軍家ヲ看護ス
同年九月ヨリ十月ニ江戸市
ヶ丸の城ヲ普請ヲ勤し
同十七年四月日光 市祐未のとき江戸
大橋市ノ番ヲ勤し
同年八月ヨリ翌年十一月ニ至て大
橋の浅ノ番ヲ勤し
同十八年十一月ヨリ翌年四月ニ至

て田安の清門書と勧めうまつる大橋の
山門書とたしむし

万助忠政　家紋葵別紋九曜

信一

初八幡井勅四郎　伊豆守従五位下
従四位下
永禄三年二月苅屋八町小おめく屋
引同心の名と合戦味方おく
敗北せんとせしき信一勢とおく
敵をたをしうけ味方勝利なる
同四郎後引糟屋名治三引名治の城
小まくごりう名治

東照大権現信一ゟ命じて中山の城ともも
らしめて、おゝへと寺出沢が兵出張して
度こ和平をかゝ信一豆腐のさゝへをゝ形
貴とをゝ守りけゝ
大権現清ゆるのゝきゝ信一諸人ゝ先ゝ
て城中ゝせめいゝ敵のまゝうちとりて
ゝの小城とゝおとす
石ケ瀬二度の合戦ゝ信一ゟとゝぐゝ
てたゝうひと吏寸

同ゝ三月ゝ一向宗蜂起のゝき野寺
れおゝへとゝて和しゝゝゝ小ゝの敵
つゝゝてたゝうひと吏すと以どゝ信宗
の門徒方ゝゝ一揆とおゝしゝゝひさた
ゝ以へ信一ゝもしゝひゝ敵とゝ出ゝげ
猪利とゝわゝうのゝ古井清ゝ
大権現の法ゝゝ小ゝゝみゝ小敵と迫
敵鉄炮ゝゝ信一ゝ右の股とゝつゝゝわ
立ゝゝたゝ寺敵ゝとゝ大ゝ

よりつて清玄寺信一おさつてとゝみ
もせく鉄炮とゝもつるものと亜号するとき
こゝろうの敵引きわづく
大檀現信一ゝ勇力つゝてゝ亜号せゝる
と感じまふ
同十年信長義昭と二度せゝ立てんぐ
め引引征伐のときかゝ勢と
大檀現ゝゝつゝちゝ信一ふゝ義て引引お
もふふ信一いまぐ信長ゝ清ぐろう

信長信久百万騎つ軍信長を使ゝて一方の
先陣ゝゝ毫さのゝゝどぐ見みゝわ
信一信ねふ先ぐゝて善信の城を攻体
ふとゝうやぐる清ねも同ぐゝすん
てせあゝゝ二九ゝ毫づゝとき死ゝ底ぐ
くゝものおゝくゝて士卒ゝゝみゝず信一
先とゝんくいうぐるせゝみやゝ
先とゝうゝ兼ゝゝて秀吉の兵を又城
ふせあゝるさゝ紀信大言ゝとゝぐくい

ひるハ列挙軍勢信一一番ニ当
城ニせあいうとよりとゝ多勢を話人さく味
方建部源八郎ハ城といでのまき
武蔵作没落す先ハ佐ゝ木義頼
書寺山と指ゝく甲賀ニ川ハ望日信一
信長ゝ味方信長れいくしと及ル軍功
味ニ比べ大ニ感じて名ゝ高
の桐の紋ハ使用ゝ信長上洛乃
ゝき信一使ハ義昭と和軍ハ

居たまゝ後信一いゝ面とふ所ゝ相手の
鉄炮一挺と指ゝて三列ニ連ね
大權現ハ尚ゝ強ル軍中のゝなゝ信
長のゝまゝとゝ色たまふ位一くゝ軍
事とのゝ使用義鉄炮とたまゝると言
とゝ記ル

大權現ゝるゝ法感ゝ
同十一年長作田村山城攻ル川
氏の但但ハ商ゝて田中の一撰ゝ

一吉列城河の城よたてごろうとき
大指現初めて吉列ふ入まふ左士卒ふ
命じていの城と一時せあ賊流
と生く誅すべしの　作まう林尓吉
康政先ゞけしして屏ふ隠さ底とかうる
信一いくみさんで城よりる士卒ちぐいて
せあいう城郭とうらやぶう城中の兵とこ
とくく誅す
元亀元年六月ある姉川合戦のとき

信長ハ浅井ましい
大指現ハ勢ゑこうるまきふ信長の先ゞ
すくふ敗北を
大指現の先陣いくみさんで信一馬とも
せくたうひと交し甲首二級とうちとる
ゆ味いくれ家くく軍とする先
れし勢合ひて敗北を
天正三年長篠合戦の時信一士卒とし
けまして戦功いう

同十二年尾引小牧陣のとき信一
大指現ていこうの心をもて我志をけす
同十八年小田原陣ゝ信雄
大指現
右遠院殿奥列京勝伝代のゝ御金蔵の
ときゝ信一家臣ゝ御おゝく
右遠院殿ゝ御なりたまふ時起の
ゝ同くれ御上洛ゝて

見をたいけ招りんとく
大指現信行義宣敬義のきろゝをて
渉雑なるおゝくうれ結局をえらびて
信一ゝ布川の城ゝもとめて信行おさん
ゝ信一言ゝ
我場ふりぐまふ一度し清を
かくとけこの度我場ゝむらる
ハなことゝ
ぐてきれあひぐけにのおさんゝおゝくかい

たく是をまもりべきのよし須賀守
同六年常陸国土浦の城を給り侍加増
ありて二万五千石を領す
同年従五位下に叙し伊豆守任す
同七年四月佐竹氏とのゝかくにより常
州江戸崎の城番を勤む
同年七月信吉病ありて土浦城に信一
を同国水戸の城番を勤めらるゝ須賀
ふしうる

信吉

伊豆守　従五位下　安房守
実は松平右近将忠吉が子なり
慶長七年四月常陸府中の城番を
勤め同七月より以来ありて上洛参勤す
て又父信一より分かりて十二月朱印を賜ふ
同九年従四位下に叙す
寛永元年七月十七日卒す法名道雄

諸の城番と勤しむ

大指現信長公の城番と勤むるもと

いとらたまひ引き五ヶ所の所をを

下さる

同九年 淀城下に叙し安堵せらる

任ず

同十年

長浜院殿寺と法ひて羽軍宣下法

参内のときさ信長法馬ふくさ左方引

のと首とちらす

同十八年 鈞命ふちり松平甲斐守ふ

ちらして伏見の城番と勤し

同十九年大坂乱のとき信長伏見城

井伊掃部頭松平隼人佐板倉伊賀守淀

亀山城ちとねしかりてものの見とたりけ

大坂の寄るもときして江戸後河守淀寺

大指現

長浜院殿寺多教のりて十月信長命じ

て小出大和守より岩和田の城をまもら
しむ十一月奉書をたまはりて岩和田
城を小出出羽守へ渡し　信吉六年歳ふる
る　伯父とうあたりの事ふいなり
このときに京極丹後守同若狭守と重て陣
すこのときに大坂へ附城をきづ
いく信吉九歳にて新庄越前守二九と
同年ふいなり
豆州城のときに信吉伯父
古浦城敵伏見城の城書を動し
元和元年四月城書と一色三河守備後守
古浦防戦して大坂へ陣すべきに
伯父の名代として同出る伏見より仮屋
て陣をとる五月七日大坂合戦のときに信吉
先手にて戦場にて出しに信吉と
ともにて高砂と和泉守と庄
こまをとりく
大将現にて出すに岩屋山にをく

有馬寺　作いとくかくおぢめとして
所と云る庵ゞ申もねたらゞぞく市感
をめたしゝ沢
同年五月大坂より伏見へとして又市
書を勤む
同年八月伏見の城書と成田左る助ようと
して行ゝ城ゝ
同三年常刑士酒の城とつくるあと野高
清の城ようゝとして一万石代清加藤と有馬寺

同五年三ゝ清の城とつくるあ毋後毛山の城
ようつゝ紀伊のさゝ
同六年八月朔ゝ卒寸　清名京沢

忠國

山城守　淀五位下
寛永十二年初めく
大膳亮
左近衛殿と有ゝ

同十四年十二月廿五日

石清水殿の清水ふく元服し法華の忠孝
子と称し清判なしこれ色水の法腰物
と為し山城守と号す

同十九年正月従五位下に叙す

元和元年五月十五日大坂合戦のとき父と
ともに共陣にて軍功をぬきん
甲首一級をとりて

石清水殿の清流にうるへくれしなるこれ
感ずる

同七年六月十五日東福門院内入内時
供奉引し後馬にて奉行列の上首と
なる

同年父信吉と法と為す

同八年二月廿六日馬之書頭に代く冊
波福地山の城書と勤め八月小にして城
書と異動同脇正に没す

同九年八月廿七日

将軍家征夷大将軍ふ任ぜ給ふ参内の時
忠國持る給ふ仗を以て左方行列
之首とたり
寛永三年九月廿二日源の城へ行幸の時
将軍家清しうして御参内の供をふ
列し奉り列の之首とたり

忠晴

伊賀守　従五位下

■寛永十二年初めて
大猷院様を参詣なされ
同十四年十二月廿五日
台法院殿の御参の時元服の時御諱の忠
の字を給ふ御判たまひ行光の法
服拵を頂戴す
同十八年
台德院殿の命によりて御服書とたり
大坂安度の御陣に供奉して御ふ

を侍す

元和元年三月廿七日淀城を紀州

伊賀ヶ上野へ

寛永九年四月十七日

将軍家の御上洛にて淀城書院番の人々

同年京地の御加番を仰付す

同十一月十五日

書を勤む

同十一年

鈴木内記殿淀城

同十二年十一月十日大御番の頭となる

同十三年十月十日豊後府内城番を勤む

同十六年四月十四日豊後府内城番を

二條の御城へ立番す

同十九年七月廿五日江戸へ参して八月

十二日大坂へ城番を勤む十九

日にて同月廿九日江戸へ

おもむき九月十二日に猪引田中の城を落
りて二万五千石を領す

忠俊

刑部少輔
寛永十三年八月十五日初めて
将軍家に御目見す

信久

勅四位
寛永十一年六月朔日初めて
将軍家に御目見す

山城守忠國 家紋 葵 ただし 御前
あるときは 鳴 酸草 を用ゆ
かゝ又桐を用ゆ 事は信也より信一に始る
皮肩織の紋なり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan